

ビジョンとビジョネール（63・4・16）

岸本 通夫（昭14文丙）

只今過分のご紹介にあずかりましたが、あの勲章の事をちょっと申しますと、パルムアカデミックスと言う勲章ですが、これは三段階ございまして、兵隊クラスと、将校クラスと、部隊長クラス、私どもは云うまでもなく一番下の兵隊クラス。つい先日亡くなれました桑原先生は、同じ勲章ですけど最高クラスの部隊長クラスで、私もフランス語を教えておりますと、まあ真面目に三十年もやっておりますら、だいたいフランスから勲章を頂く事になっております、まあ特別功労があった訳でも何でもございせん。それからルーマニアの方は、同じ三高の先輩の新村猛先生、日本ルーマニア友好協会の会長をやっておられます、新村先生から、大阪支部を作ろうと思うのやけども、岸本お前やれと言われまして、それでまあ多少の奔走致しまして、日本ルーマニア友好協会の大阪支部が出来まして、まあその会を作るのに多少ほねを折ったものですからいきがかり上大阪支部の支部長いう事で、まあ幸いにして初代支部長にさせていただきました

て、で、まあ支部長になったら、出来る迄は何でございませうけども、後は座って、ええ結構です
など言っていたらしまいなんですけど、それでも十年かそこら勤めましたので、ルーマニア政府
から一応勲章が出ました訳で、まあフランスもルーマニアも一応勲章でございませうけども格別の
事は何もしませんのですけど、まあそういう勲章頂戴しました訳でございませう。

そんな事で今日のお話でございませうが、思い出しますと、私ども三高の時は偉い先生が沢山
おられましてというよりもおいでになる先生が皆立派な偉い先生で、私どもは最高の教育を受け
て、お陰様でまあこうして学問らしい事を一生勉強出来ましたのでございませう。こういう席に立
たせていただいて思い出しますと、あの先生もこの先生もみな懐かしいのでいちいちお名前あげ
てどうやったというお話もしたいのですけれど、うっかりして一人二人とぼしたりしますと失礼
に当りますので、まあクラス担任と言う事でごやかになりなりました代数学の秋月康夫先生・折
竹錫先生を代表に致しまして、三高の我々の時分の立派な先生を皆さんとご一緒に偲んでみたい
と思う訳でございませう。それからまああとの話にちよつとしまいの方で出てまいります、同窓
会会長を永らくお勤めいただきました、坂倉篤太郎先生、それでまあ今日のお話にうつらせてい
たきます。

これは資料という程でもございませうですけど、まあちよつと用意して参りましたが、人数た
らんかもしれませんが二人一枚位の見当でおゆずり合せていただきました、それで本日の題は幻

視と幻視者という事で紹介して頂きましたが、まあフランス語で申しますと、ビジョンとビジョネール、ビジョンとは何か言う事がある人に聞かれまして、大分考えましたんですが、まあ幻想、あの幻ですね、それから構想——その幻想から構想へ行く迄の間に出てくるのがビジョンと、そういう風に言っておけば一応よいのではないかと思います。

そういうビジョンの話をしたします訳ですが、一番初めにちょっと話は飛ぶみたいですけども多数決の事をちょっと考えて見たいと思います。

その多数決という事でございますが、その多数の意見に従うのが民主主義の基本みたいなもので、これ程結構な事はない様でございますが、少し考えてみるといささか問題がないでもない。それは例えば、数学の少し難しい位の問題を出しまして、五〇人のクラスで四九人迄解けなかったけれどもただ一人解答者があつた、これ多数決からいうとどないなるのか、答え出した方が間違つとるのかいう事になる、これはいう迄もなく解いた方が正しい訳です。で、そういうたつてそれは数学はそうかもしれんけど世間の事はそうはいかんという事になるかもしれない、なかなかそうもいかん。

例えばこの京都で、まあ足利尊氏が一ぺん負けまして、で、九州迄逃げに行った訳ですけれども、向こうで二〇万という大軍を集めまして瀬戸内海をこっちへ攻めのぼつて来た、でその時に楠木正成が暫の間後醍醐天皇に叡山へちょっとかわしていただいて、それで足利尊氏の二〇万の

軍をこの京都の町へさそい込む、そうした上で京都の七つ程の口を全部封鎖してしまう、それで食糧が入らん様にしてしまう。そしたらこの食糧がたらん様になる事がわかってますし、そないしとる内に戦争するのが段々二〇万の兵隊みなめんどくそうなつてまいります。そこをこてんく／＼にたたこうという事を楠木正成が提案致しましたんですが、堂上のお公卿さん方がそんな天皇陛下に又叡山に逃げていただくそんなむちゃな事があるかいなあといい、これが実は自分らがその叡山迄ちよつと逃げて行くのがめんどくさかつたからなんですけれども、折角の楠木正成の名案をみんなで多数決でつぶしてしまひまして、しょうがないから楠木正成、そもそも多勢に無勢で勝負にならん事が分つていますけれども、兵庫へ行つた結果按配あの通り戦死してしまひまして、この折角の楠木正成の作戦もそれ迄という事になつてしまひました訳です。

でまあこの素人の考えでも楠木正成の言う通りやつとつたらよかつたのにと思ふんですけども、多数決に従わざるを得なかつたばかりにそういう事になりまして、という様な事がまあ楠木正成だけやない、いろんな民族の歴史上の民族の危機いう様な時にそういう事も何べんもあつたかと思ふんです。そやからして多数決言うたら大変結構みたいですけれども何も絶対的なものでない、これはやっぱし経験重ねておる内に多数決が必ずしも絶対的でないと言う事はある程度みな分つておつたみたいでして、三分の二の多数決で決るべきだとか、或いは拒否権——拒否権ゆう事は全員一致でないといかんと言う事ですけれども、そういう風な多数決に対する対策みたいなも

のが、まああっちこっちで考えられている訳でございます。そやから多数決必ずしも絶対的やない訳です。でまあそういう話を前置きに致しまして、このビジョンと言うフランス語を辞引で引いてみますと、神さんの姿を見る事と書いてございます。でまあ、西洋史をたずねてみますと神さんにお目にかかったという人が西洋の歴史になか／＼何人もおります。で西洋だけやない、インドとか、チベットに行きますと、神さんにお目にかかった人、なかなかあるんやないかと思ひますけども、まあ今日は西洋史の話だけに致しまして、まず一番初めが新約聖書に出てくるパウロ (A. D. ca O-60) という人ですね、あの人は初めはキリスト教反対の方、キリスト教はけしからんという——、当時のまあ一方の旗頭やたらしいんですけども、それでそのダマスカス町におるキリスト教をこてん／＼にやつつけ様と言うので、エルサレムの都からダマスカスへ、当時の事ですから、てくてく歩いて行っておった所がその途中でひっくりかえって(顛癈)、そのときに神様が表われた、神さんとお話した結果今度は反対に熱烈なキリスト教信者になりまして、あのとおりロマ書とかコリント書とか書きまして、キリスト教の聖者になって、最後はローマで殉教する訳でございます。

それからアシーシのフランチェスコ (1181—1226) と言う聖者、この人はアシーシの町の豪商の息子で、初めの内はなか／＼よう遊んどった様です。でそれが隣のペルージャの町とアシーシの町と戦争になったときには刀をとって戦争に出て、なかなかやつとった。それが病氣した時に、

ある日の事キリストさんのお目にかかって、すっかり心を入れかえて、それでこのままではいかんと言うて、それでフランチェスコの僧団を作りまして大変活躍した。で縄の帯結んで洗礼者ヨハネの後に従えと廻りに人を集めて大活躍しました。それからラモン・ルユル(1236—1316)という、地中海の真中に浮ぶ、シヨパンとジョルジュ・サンドのマヂョルカの島、この島の出身のこの人も騎士の身分やったんですけど、これがやっぱりキリストさんにお目にかかったのが切っ掛けで熱心なキリスト教信者になりました、この人は回教徒に十字軍の様な戦争でなしに、教条問答で回教徒をキリスト教に回心させるんや言うて、アラビヤ語を一生懸命勉強したり致しましたそうですが、この人はまあ海を越えてアフリカの北の方へ行く事はなかったのですが、この人も神さんのおめにかかった人で、それから皆さんもよくご存じの、ジャンヌダルク(1412—1431)、これは神さんにお目にかかったんやないけど神さんの声が聞こえて、それでフランスを救うために立ち上った。最後はあれは魔女やという事で火あぶりで死んだんですけど、これも神さんの声を聞いた。

それからもっと新しい時代では、ルールドーピレネー山脈の北側フランスのルールドいう所の、ベルナデット・スービルー(1844—1879)という、一四才位のときにマリヤ様の姿に導びかれて、それでここ堀れ言われた所を堀ったら水が出て来た。でこのベルナデット・スービルーは、まあ一回や二回やない十八回迄マリヤ様におめにかかっておる。でローマの教会でも色々調査に赴

いて、確かにこれはマリヤ様が姿を表わされたのに違いないという事になりました、この人は三〇いくつ位で背椎カリエスでわりと若死にするとるんですけれどもまあこれが最近のマリヤ様に、神様にお目にかかった一人です。

それから阪大理学部生物学部の学生なんですけど、この人が冬の寒い朝、雪の降った朝に阪大の理学部の屋上へ上った所が、天から神さんが下りてこられて神さんと問答したゆう事です。私この人にお目にかかった事はないので話だけで名前も知らんですけれども、まあそんな人がおります。

これも多数決からいくと「神さんにお目にかかった?」「阿呆な事言うな」というようなもんですけれども、自分に見えなかったから人に見えるはずがないと言うのがこれが独断かもしれませんです。で多数決から言うとなんという事はあるはずがないというものの、現にお目にかかった人がおる以上はどうもこれ私もそういう事も有りうるもんか、そんな事はないのかちよつと分かつかねる様な気がしております。

それでいよいよ本題で、この宗教と文学と科学について少しお話させて頂きたいと思えます。なんにもそれだけに限りませんので造形美術の方では、あのカタルニヤのガウデイという大変な建築家、この人のサグラダ・ファミリア等と言う大きな教会がまだ出来上っておりませんので、それより先にガウデイが死んでしまいましたけれども、造形美術の世界にも立派なビジョン、そ

のほかにもゴシック建築とかなかなかあるだろうと思います。

ええ、ところでまあビジョンと言えば、釈尊の菩提樹の下で悟りを開かれた。これはこの恨みを抱いて復讐をする。そうすると今度復讐された者がそれを又恨みに思つて復讐する。これは勝つても負けてもこの調子では、永久に人間の世界に平和は訪れる事がない訳です。それでこれは人間がある時点で恨みを断ち切つて、そいで復讐するという事をやめん事には人間の世界に平和というものが訪れないと。仏教はインド人というのが哲学が大変好きでして、そういう釈尊（B.C. 549—460）の最初の教えをたねにして、だん／＼複雑なインド哲学の世界を作つて行つた訳だけれども、釈尊の初めの教えというものは、人間の恨みはどっかで断ち切らないかんという、そういう割合簡単なもんやなかつたかと思ひます。ただそれがな／＼出来ない、それでその釈尊の教えを初めと致しまして、浄土宗の法然上人（1133—1212）、浄土真宗の親鸞上人（1173—1262）、曹洞宗の道元禪師（1200—1253）等、各派の開祖にもそれぞれのビジョンがあつただろうと思ひます。それでまあ、キリストは言う迄もなく、マホメット（571—632）、こういう人それぞれなんらかのビジョンを抱いたに違ひないと思ひますが、そいで今度は文学に於けるビジョンと申しますと、ええ今のそういう宗教の教えを書き印した、要するにお経ですわね、仏教で言えば法華教とか大乘起信論とかすごいビジョンが展開されておる様でございます。旧約聖書で言えばどんな不幸な眼に合つても最後迄信仰を捨てなかつたヨブ記のヨブとか、それからまあそう

いう經典でなしに、文学作品ダンテ（1265—1321）の「神曲」とか、ランボウ（1854—91）の散文詩とか、カフカ（1883—1924）の「変身」とか、「城」とか、すぐれた作品、それから中国では司馬遷（B. C. 2—1C.）の書いた「史記」これは「史記」——歴史の話とは言うもののこれを書いた司馬遷には私はどうも雄大なビジョンがあつて、まあそこ迄司馬遷の「史記」は深読みせないかんもんじゃないかと思つております。原点に戻ればこの文学そのものがすなわちこのビジョンを言葉で表現したものではないか、文学はそのままビジョンという事が出来るのではないかと思ひます。

それでいよいよ今度は科学に於けるビジョンの話。ええまず地動説を始めたコペルニクス（1473—1543）ですけれども、これは、太陽が地球の廻りをまわつとるのやない、地球が太陽を廻つとるんであると、そういうこの一般の人の見ないビジョンを見た訳ですけども、この人はこんな事いい出したら大変な事になると思つてそつと書いただけでそいだけにしとたんですけども、これがガリレオ（1564—1642）に至つて望遠鏡等を發明したりしまして、実際に木星の廻りを四ツの小惑星が廻つておる所を見たりしまして、でその事をはつきり言つた、そうすると無論ローマの教会の方からえらい怒られました、これもその時分はルネッサンスの時分ですから、ジュリオ二世というなか／＼頭のひらけた法王がおつたらしい、この人がある程度ガリレオの言う事を認めておつたようですが、やっぱり教会の手前、はつきりそれもそうや言う事が出来ません

で、まあ、ジュリオ二世は理解してくれたものの残りの連中が教会の裁判に呼び出しまして、お前はもうそんな事言うたらいかん、ゆうて怒られてしもうて、それでガリレオはしようがないもんやから「そんなこと言うたって、地球は廻つとるがな」と言いながらそれから静かに黙つたという事です。

それでそういう事に基づいてやがてニュートン（1643—1727）の万有引力という説が出てきます。所が、これも物体が大変な速度で——光に近い速さで走る様になつたらニュートンの学説通りにはいかん、そこでアインシュタイン（1879—1955）が相対性理論という形でニュートンの万有引力の学説に修正を加えた訳でございます。そうする内に今度は一方からダーウイン（1809—1882）のビジョンが基になりまして、つまり生物いうたらちよつとずつ変化しておる内に今日の様な地球上の動物・植物の分布になつたのである。そうゆう進化論が出まして、これも大変な騒ぎになつた訳ですけど、やがてダーウインの言う通りではないかと多くの人が考える様になりまして、これはもうこの生物学に止まらず学問の色々な方面へ飛び火致しまして、まあこの十九世紀の世界の一大思想傾向になつていった。

所が、これが又そない言うたって少しおかしいのと違うか言うて、今西先生の疑惑、それから批判。それから今度はちよつと飛びますけども、ベルリンに生まれたアルフレード・ヴェゲナー（1880—1930）という学者が大陸漂移説という事を唱えまして、……、「大陸と海洋の起源」と

いう書物を出しております。私このヴェゲナーが大変好きで、岩波文庫の翻訳を大事に持って歩いておる訳でございます。

それでなか／＼この本、世間の人には訴えたいですけども、その当時の地質学者は「そんな阿呆な事あるもんか」というた訳ですけども、やがてだん／＼証拠が上って来てそれで今日のプレイトテクトニクスを始めた人は帰する所この今のヴェゲナーに他ならない。そのヴェゲナーは自分の学説の証明の為に、グリーンランド、雪の大陸へ調査に赴きましてそいであの氷の大陸を横断しよって途中で遭難して、五十いくつ位で亡くなっておりますでございます。ビジョンというものはこれはビジョンを見た人——ビジョネール——幻視者、これがこの、人の見ぬ物、普通の人には見えん物を見てそいでこういう風になつとんのやと言うて、人にいうわけですけども、見えんもんですからそいで大騒動になる、「そんな阿呆な事」ゆうて初めは皆思ふ訳です。太陽系の回転にしまして、今日では常識になっておりますけれども、そんなもののこの太陽が回転しておるその上の方に人間が立つてそいでわつと見渡したって土星のとこ迄見えませんです。

それからダーウインの進化論にしまして、長い事／＼かかってそういう結果が出てくるわけですから、人間の一生——百年にも足らん位で見とったって見とどける事できませんです。

それから、このヴェゲナーの大陸漂移説にしまして、人の見とる前でずっとアメリカ大陸と

ヨーロッパ大陸が分れて行きよる所が見える訳はございません。で、万有引力はこれはリングが木から落ちる所を見たわけで、これは誰でも見られますけれども、万有引力そのものが見えとる訳でも何でもありません。りんごが木から落ちるのも太陽が引っぱつとるのやと、いや太陽やない地球が引っぱつておるのやと、これも目に見える物でございせんす。それからまあ天動説から万有引力へ、相対性理論へ、そないしよる内に量子論とゆうのと、一方では宇宙論が更に進みまして今日の我々の太陽系の外に銀河系がありその又外に他の銀河がなんぼでもあつて、まあ宇宙ゆうたら広い／＼もんで二〇〇億年たつたとかゆうんですけれども、そういう今日の世界像に至つた訳です。

で、これはまあ大変偉い人がこのアインシュタインにしましても、量子論のニルス・ボーア(1885—1962)とかそういう人は皆偉い人で、私このビッグバンの学説やつぱりまあ人間いうものが知恵を集めてようそこ迄今日の物理学的世界像を築き上げたもんやと、まあ人間の頭脳も大変なもんやし、これをけちをつけ様という気はない。ほんなもん大した事ない言う気はない、みな偉い学者に違ひないのですけれども、それでもビジョンはついにビジョンである。

要するに、このビジョンという物は歌みたいなもんや、雲・風・空に浮ぶ雲、あしの葉をそよがせて通り過ぎる風、そういう風なものであるという事も一方で考えておつて然るべきではないかと、要するにビジョンというものは解釈ですわね。それでこの目で見てああ確かに絶対に最後

的にそうや言う事は誰にも言い切れへん訳です。

そいでまあその、ビジョンというのは、目に見えるはずのない事を見て来た様に言うわけです。まあそいだけの事やと、こういう事をこのなんば相対性理論の難しい数式、式、それから量子論の難しい式があるにしたって、そない言うたってビジョン言うたら結局は歌ではないかと、そういう事を一方では考えておく必要があるのではないかと思います。そいでまあたいていその見えもせん事を見て来た様に言うもんですから、そいで大騒ぎになる。「そんな阿呆な事あるかいな」と、初めは誰でも思う訳です。

そいで先ず大騒ぎになってそないしよる内にやつぱりそうかなあと思う様になる。そやけどもまあそういう大騒動になるビジョンばかりでもない。至ってささやかなシーンとしたビジョンもある訳です。

例えばかつて明治の終り頃、金沢庄三郎（明治―大正）という先生が、「日韓両国語同系論」、そういう書物を表わして、朝鮮語いうたら日本語から出たもんやと、日本語が基で朝鮮語になったんやと、まあそんな事言うた訳です。そやけども、日本語と朝鮮語を勉強してみると、そんな事を根拠にそんな事いい出したか、合理的な根拠が乏しい、これはもう学説と証するに価しないと私は考えます。そやけどまあその当時朝鮮を植民地にした日本の政府にとってはなかなか結構な説だった様です。金沢さんが何を考えておったか知らんけれども、結果としては金沢博士は

御用学者とされても仕方がない結果になっておる訳でございます。

それから星移り年變つて、今度は逆に朝鮮語から日本語が出て来たんやという。これはええ、こんなファクヒョンシユクと読むんですか、そういう朝鮮の人が「八卦よい」言うたら朝鮮語やゆうて、そらとんでもない事です。第一その「八卦」いうのが中国から入った漢語であります。要するにこの人は朝鮮語から日本語が出て来たい訳です。

この本がまたえらい売れたそうです。それでそんなもんあかと私言ましたら、読んだ事もないのにそんな事言えるかいわれて、しょうがないから私高い金出してこんな本買って来て読みましたけど、やっぱり素人さんですから、それでやっぱり音韻法則やなんか難かしそうな事いってますけども、音韻法則いうものがちゃんと分つてないし、朝鮮語も日本語ももう一つよう分つてない。そやけどもちょっと變つておもしろいやないかと世の皆さんに読んでいただいて、二版も三版も大變売れたそうでございます。

しかしこれも又失礼ですけれども学説とは言えない。そやけど朝鮮語勉強してみたら分りますけど、日本語と似たところが沢山あります。それでこの私にしてもこの海峡をはさんだ隣りどうしの日本語と朝鮮語が無関係であつたとは主張出来ない。

つまり関係があるのに違いないと私も思っております。しかしそうかと言って、日本語から朝鮮語が出来たのでもないし、その逆でもない。それならなんぞ別のXの原語から日本語と朝鮮語

が出た。これはこのラテン語からフランス語とイタリア語が出たゆうのは、これはちょっと勉強したら誰でも分る事です。ほんでまあ変った事ゆうたら本は売れるらしいです。「変つとるな、おもしろいなあ」と読むだけなら結構ですが……

それで結局私の考えはどうゆう事になるか申しますと、やっぱし言葉としては日本語と朝鮮語は別のもんには違いない。そやけどもこの別やけれども日本民族と朝鮮民族が隣り合せに住んでおつて、そいでこの言葉の上で互に影響があつたに違いないと思います。

それで、それはきつと大興安嶺の森林の中あたりで相隣る二つの言語・民族の二つの言語という事で深い関係が続けて来た、その結果今日勉強しても日本語と朝鮮語ゆうたら似たところがある、それはもう間違いないそれは影響し合うたんだとそういう風に考えております。

それから朝鮮語についてちょっとややこしいのは、北朝鮮の方では朝鮮語・南朝鮮では韓国語言っておりまして、これうっかり朝鮮語ゆうていますと、今度は韓国語の方から、文句が出る。韓国語言ってもらはな困る。で、多分その事を考えまして、NHKの語学放送ですけれども、英語やフランス語は、英語放送、フランス語放送でええんですけれども、朝鮮語だけは朝鮮語放送いわんとアンニヨハシムニカ言うて両方に遠慮してあつちつかずこちちかずという風に、ええ私はこういうのは朝鮮人にしたって決して喜ばしい事ではないだろう、両方のこの韓民族・韓国・二つの国が何とか一つになって、そいで二つの朝鮮語や韓国語や言わずに一つの言葉になって、一つの

言葉という事をお互に同じ民族であり、同じ言葉のまあ東京の言葉と関西の言葉と違う様な方言使っておるだけだと言う様になってほしいと願いを込めて、朝鮮語・日本語と朝鮮語という言葉を使いましたけども、私もこれは重々考えながらどうぞ一日も早く南と北の朝鮮が一つの国になる様にそういう願いを込めて「日本語と朝鮮語」まあこうゆう言葉を使っておる訳でございます。

日本語と朝鮮語

——小沢重男教授・梅棹忠夫教授への書簡——

小生の危機感、偏えに、これ程明らかな確かな事実を見送っている内に、またどこかの西洋人に油揚げまたは大魚をもっていかれてしまうのではないかとあります。朝鮮語と日本語とがどんなによく似ているかは、朝鮮語を学びはじめた日本人が誰でも直ぐに感じるところで、まるで双児のように——一卵性双生児とまで言い切るのは遠慮するとしても——相似しているではありませんか。

類型上の相似は、系統問題を論ずるためには何の参考にもならないというのが学界の常識とやら聞き及びましたが、それでは御伺い申し上げたいのですが、単語が似ていて、それらの間に音則の対応さえ発見できれば、例えば日本語とモンゴル語との同系は確証を得たことに相成りますのでありませんか。

音則なるものは、先刻御承知の通り、借用語についても成り立つのではなかったかしら。中国語から日本語・朝鮮語へ入った漢語・漢字語の漢字音について、ラテン語からゲルマン語に入った語彙について、フランス語と英語の間、ゲルマン語とフィン語の間、等々例証はいくらでも挙げられましよう。これを要するに、音則は両刃の剣、問題の語が借用語に非ざることの明証のなにかぎり、当該両言語の同系論はまず蜃気楼よろしくではありませんまいか。日本語と朝鮮語に関する限り、両言語の底に一つの共通基語があったとする想定に筆者は全く懐疑的であります。数詞はバラバラ——一から一〇まで数詞を並べて、英語と仏語なら、*oinos, *dwōu, *treyes, ……、*dekmまで、一〇個の数詞があるだけです、日本語と朝鮮語では二〇個の数詞がある。その他、親族名詞・体部の名称・「食う」「飲む」「行く」「来る」「見る」「聞く」等の語彙の基本をなす動詞、その間に殆ど特殊かつ顕著な一致は見られないのであります。M. Swadesh氏の *glottochronologia* を絶対視するものではありませんが、同系の二言語の間には、紛れもなう一致ないし対応がもっと明らかに確かに見て取れる筈のものと考えるのであります。

それでは筆者は、日本語と朝鮮語との酷似から、一体如何なる結論を導き出そうとするのであるか。論述の便宜のために、しばらく意味単位 *unitas sensus* なる概念を導入することに致します。

単語といわれるように、一つの語 *mot*, *word*, *Wort*, *slovo*, *verbun* は、それ自身、一定の意味

範囲をおおう一単位であつて、一つの言語から外へ出ることをしないかぎりにおいては、特に意味単位というような概念を設定するには及ばないのであるが、考察の対象が二言語にわたるとき、場合によっては、問題は簡単明瞭なままでは済まなくなる事もある。例えば日本語の「飲む」は英語の *drink*、これなどはあまり問題はなさそうであるが、日本語の「食う」はどうであらうか。英語は *eat*、そこまではよいとして、ところがしかし、英語は「食う」だけでよいが、日本語には「食べる」という動詞もあり、これもまた *eat*。すなわち英語の一単位に日本語の二単位が応じている。

もう一つ問題にしてみたいのは、次のような例である。英語の *fall* はどうなるか。改めて問うまでもない。この一意味単位は、日本人の目には画然と相異なる二つの動詞「落ちる」と「倒れる」に対応する。しかもこの関係は、英語のみにはとどまらない。仏語 *tomber*、スペイン語 *caer*、ロシア語 *padatb* 等、西洋語は軒並、一つの意味単位で日本語の二単位に応じている。これを合同 *congruens* と称し、*fall* ≡ *caer* ≡ *padati* のように表記すれば簡便であらう。ついでに一言しておく、ラテン語の *cadere* が、イタリア語 *cadere*、スペイン語 *caer*、ルーマニア語 *cadea* のように転じて、仏語にも古くは *cheoir* なる動詞があつたが、この語は廃用に帰して、代つて *tomber* が用いられるようになった。しかしそれでも、新しい *tomber* は、古い *cheoir* ≡ *cadere* の二重の意味をそのまま引き継いでいるのである。確かに *tomber* と *caer* の二語の間に、

語源の上のつながりはないのであるが、実はその意味の在り方においては、共通基語ラテン語の状態を映し出しているのである。

同様の例をもう一つだけ挙げてみよう。英語 ask ≡ 仏語 demander という一つの意味単位は、日本語の 1) 「(……してくれと) 頼む」と、2) 「(……かと) 尋ねる」の二つの意味に対応し、一方ロシア語の *prosi-ba* 「頼み」と *vo-pros* 「問い」から推定されるように、印欧基語の語根に「頼む」「尋ねる」の両義があったことが知られる。さらにラテン語 *quero* にも「頼む」「尋ねる」の両義が認められる。そこで ask と demander の二語の間に語源のつながりはないが、ask ≡ demander の合同は、実は共通基語の状態を反映していることが知られる。

しかし、英語 play ≡ ドイツ語 spielen ≡ 仏語 jouer ≡ ロシア語 igratb は、日本語の「遊ぶ」「(楽器を)演奏する」「博奕する」の意味に当たるが、この場合は、印欧共通基語にこんな三つの意味を含むような動詞語根があったようにには思えないことも事実である。意味単位の合同が常に共通基語の状態の反映であるとも限らないことも承知しておかねばならないのである。

西洋諸語の間に見られる意味単位の合同性は何を物語っているか、まず、一羽の燕が飛んで来ても春にはならないと言われるように、fall ≡ tomber ≡ caer ≡ padati の一例だけでは、あまり多くを語らせることはできない。この一意味単位に対して、日本語「落ちる」≡ 朝鮮語 tbrn/ida ≡ 中国語「落」と、「倒れる」≡ nmnm/ida ≡ 「倒」の二単位が応じるとしても、調査を世界の言

語に及ぼしてみれば、結局あらゆる言語が、西洋語型の一単位の類型か、日本語型の二単位の類型か、おそらく二通りの類型のいずれかに属するはずであるから、その辺で問題は尽きてしまおうかと思われるからである。

しかし、西洋語における意味単位の合同性は、既述の一二例にはとどまらない。earth ≡ Erde ≡ terre ≡ zemlja は、日本語のいくつもの意味単位——「土地」「陸地」「土」「地球」等に対応し、life ≡ leben ≡ vie ≡ žiti も、日本語の多くの意味単位——「いのち、寿命」:「一生、生涯」:「人生、(人の)世」:「生活、くらし」等に応じ、heart ≡ Herz ≡ coeur ≡ serdce ≡ ルーミア語 inima ≡ anima は、日本語の二つの意味単位「心臓」と「心」に応じ、day ≡ Tag ≡ jour ≡ denb は、日本語の「昼」と「日(24時間)」に応じ、taste ≡ Geschmack ≡ goût ≡ vkus は、日本語の「味」「味覚」「好み、趣味」に応じ、serve ≡ dienen ≡ servir ≡ služiti は、日本語の「仕える」と「役に立つ」に応じ、follow ≡ folgen ≡ suivre ≡ sledovati の語は「己むなく」に従う、ついて行く」などと訳されてはいるものの、実は正確には日本語に対応のない意味単位であり、for ≡ denn ≡ car ≡ ibo のごときも日本語に欠けた意味単位であって、ことによるとこれなどは、西洋式の思考の展開を特徴づける言語表現の一端をなすものかも知れず、多くの言語に必ず見出される意味単位ではあるまいと思われる。最後に、意味単位の概念を少し拡張して、自律語 not autonomeばかりでなく、連立語 n. synonyme にもこの概念を及ぼせば、between ≡

zwischen≡entre≡mezdu が、日本語の「(両者)の間に」と「(多数)の中に、間に」に応ずる。以上のように、日本語から見た西洋諸語の間の意味単位の合同性について、相当数の例が見出されてみると、もはやこれを偶然的の所為に帰しておくことは叶わず、かかる事実の意味するところを一考ぐらいはしてみる要があるように思われるに至る。

それは、問題の西洋諸語が印欧語族に属するからであらうか。

しかし仔細に点検すれば、上に挙げた例のうち、印欧基語以来のつながりが指摘できるのは、1) 仏語 *vie* とロシア語 *ziznb* が、 $\sqrt{g^{w_i}}$ の派生語であるのと、2) 仏語 *jour* とロシア語 *deni* が、 $\sqrt{dye-}$ の派生語であるのと、(3) *heart* ≡ *Herz* ≡ *coeur* ≡ *serdce* が、印欧共通基語の *kerd* / *kord-* の名詞に由来しているという三例であって、他は概ね各語派の程度以上のつながりを持たない。実は西洋諸語の示す意味単位の合同性の背景にあるのは、むしろそれよりも、西洋の諸民族が、A. Tynbee の言うところの一つの歴史的世界を形成して、一つの文化伝統を育んで来た事実なのである。

ただし、上にも一言、1) *ask* ≡ *demande* の合同と、2) 仏語 *cheoir* / *cadere* から *tomber* への交替に関して触れておいたように、一見語源の上では無関係と見えながら、実はその意味単位の合同が古い状態を時には反映している場合があることには注意しておかねばならない。意味単位

の合同というのは、言うなれば類型論 typologia 上の事柄ではあるが、この例のように、それが系統論の問題にかかわりをもつに至ることもあり、類型論にすぎないといって、一概にこれを無視ないし軽視してよいものとは限らない。

日本語と朝鮮語の意味単位の状況を次の問題にしてみよう。

やや広い範囲に話がわたることになるが、「打ち倒す」「買い取る」「飛んで行く」「書いて見る」など、二つの動詞を重ねて、合成動詞をつくる造語法は、チュルク語・モンゴル語・トゥングース語・朝鮮語のいずれにも認められ、なかでも日本語においてもっとも生産的 *productivus* で、ほとんど自由自在に、いくらでも新しい動詞をつくり出すことができるが、日本語についての合成法の発達しているのが朝鮮語かと思われる。しかし、これは、決していわゆるアルタイ諸語にのみ特有とは限らず、例えば中国語などにも体系的にこの造語法が認められるが、少なくとも西洋語では、この手法による動詞合成は不可能であって、西洋語と東アジアの諸言語との対照を問題にしようとするときは、問題点の一つに数えられて然るべき事象であろう。

この造語法は、上述のように、日本語等ではよく発達していて、多岐にわたるが、その一つに「行ってみる」「暮らしてみる」「読んでみる」など、第二の成分を一定の意味——この場合ならば、「見る」が「試みる」の意味に用いられている——に用いる手法がある。この用法を、朝鮮語の文法用語を用いて、補助動詞 *verbum subsidarium* と呼ぶことにしてよからう。

この種の動詞が相当数見出される中に、上の「見る」≡朝鮮語 *po-da* ≡満州語 *tuwa-nbi* ≡モンゴル語 *üj-xü* ≡ウズベク語 *kor-maq* は、西洋語の 1) *see* ≡ *sehen* ≡ *voir* ≡ *videb* の意味と、2) 含み *connotation* としてもつ *try* ≡ *versuchen* ≡ *essayer* ≡ *probovati* の意味との二つの意味単位に対応するが、実は一〇余年の昔、小沢教授のある学会発表におけるモンゴル語例文中の一用法が、意味単位といった事柄について筆者が考え始める切っ掛けとなったことであった。

同種の例をもう一つだけ挙げてみると、日本語「くれる、やる…下さる…上げる」≡朝鮮語 *tu-da* ≡モンゴル語 *ük-xü* は、1) *give* ≡ *geben* ≡ *donner* ≡ *dati* と、2) 強いて訳せば *deign* ≡ *geruhen* ≡ *daigner* ≡ *blagodariti* ないしは *datif éthique* と称される代名詞の用法で表される意味との、二つの意味単位に應ずる。

次に、一つの副詞の示す用法であるが、日本語「よく」≡朝鮮語 *tal* の意味が、1) *well* ≡ *wohl* ≡ *bien* ≡ *xoroso* と共に、2) *often* ≡ *oft* ≡ *souvent* ≡ *casto* の意味に対応する。

また動詞「出る」≡ *naoda* が、本来の外へ出る——*go out* ≡ *ausgehen* ≡ *sortir* ≡ *bixoditi* と共に、例えば「ポーナスが出る」≡ *poonasuga naoda* のように、あたかもポーナスが自分自身の意志でどこから出て来るもののような表現に用いられるが、西洋語では、*bidatb nagradenie* ないしは *On donne la gratification* など、少なくともこれを支給する者が別にあることを間接的にでも表出する。

名詞から例をとるならば——、「口」≡ipが、1)その本義 mouth ≡ Mund ≡ bouche ≡ rotと共に、2)換喩 metonymia によつて taste ≡ Geschmack ≡ goût ≡ vkus の意味をもち、「口に合つ」≡ ibe matta のやうに言われる。また「あたま」≡moriも、1)本義 head ≡ Kopf ≡ tête ≡ golovaと共に、2)intelligence ≡ Verstand ≡ intelligence ≡ razum の二つの意味単位に應ずる、あるいは「山」≡sanの語が、1)本来の mountain ≡ Berg ≡ montagne ≡ gora の意味のほかに、2)wild ≡ sauvage ≡ dikii^{ウヂ}を意味するのに用いられ、「山猿」山犬「山百合」とか、san thokki (ウツギ) san talgi (ウツチ)のやうな表現がある。

最後にもう一つ補助動詞の例を見ることにしよう。「居る」≡it-ta ≡ bai-xu は、1)存在を表す be ≡ sein ≡ être bîb の意味と共に、2)継続及び反復を意味する補助動詞としての用法をもち、例えば、「読んでゐる」≡ilgo it-ta ≡ unsiji bai-xu 及び「通^{かよ}っている」≡tanigo it-ta のやうに用いられる。西洋語では、英語の進行形に用いられる助動詞 be の用法のみが継続を表す点で、東アジアの言語と部分的に通じているだけである。

意味と意味単位概念を拡張して、副助詞「は」un/unu と「も」to の用法から日本語と朝鮮語の相似をさらに浮び上がらせてもよいが、意味単位の考察は、一応上記の程度にとどめて、以下は言語表現の全体構造の側面から両言語の同相性を問題にしてみたい。

その昔、新大陸においてインディアンの言語の研究に取りかかった学者は、その多様性と共に、

過去時称を欠く言語とか、数詞や副詞が活用を示す言語とか、「雨」、「小川」、「太陽」のような名詞が動詞の活用に関わり込まれている言語とか、名詞が過去形をもつ言語とか、西洋人の想像または思考の枠を越えた言語現象を見せるもののあることに目を瞞ったと聞くが、西洋語から見た日本語というのも、平静な心で眺めれば、これが同じ人間の言語表現かと思われるほどに相異なる姿を示している。そしてその反面、西洋語と日本語が違うほど、西洋語同志は互いに似ており、日本語と朝鮮語はよく似ている。

日本語と西洋語の間の、それほど著しくかつ明らかな相違が、久しきにわたって人びとの注意を免れてきたのは何故であったか。一つにはそれは、明治の日本という状況に基づく一種のアナクロニズムのためであったと言うことはできないか。科学技術の上でこそ明白な優劣や先進後進の別を立てることもできようが、諸民族のもつそれぞれの特言言語 idiom の間に上下優劣の差別を見出すことはできない。にも拘わらず「追い付け、追い越せ」と心逸る明治の日本人は、後を追おうとすること自体が滑稽でさえある西洋語文法のまがいを計ろうとした形跡がある。例えば、おそらく世界の九五%以上の言語が比較級などという無用の形式を省いているのに、明治の日本人は、格助詞の「より」をわざわざ自律語に振じ曲げてまで、御先祖様も御存じなかった「より高い、より広い」などの比較級を創制した。おかげをもって日本語は、果たしてより高くなったか、より広くなったか、より一段と西洋語に追い付いたか。

その滑稽を嘲うのは易しいが、伝来の国語にその他数々の強制を加えてまで、遮二無二日本語を西洋語に追い付かせようと憂き身を簞した明治の日本人に涙ぐましい程のいじらしさを見る人もあるかも知れないが、やがてそうした迷蒙の外に立ち、日本語に即して、日本語の中から、日本語を見つめる人が現れたが、管見のかぎり、それは、国語学者ではなく、数学者の三上章氏、ついで英語学者の中島文雄氏である。中島氏の近著「日本語の構造」(岩波新書)は、曇りのない眼で、つまり西洋文法の惑わしを受けない眼で、日本語の姿がしかと身据えられていて、爽やかで快い。

例えばここに——深く立ち入ることは今は控えたいのであるが——西洋語の命題文に対する日本語の描写文という、及ぶところの大きい一つの提言がある。(それではアリストテレスの三段論法などは、日本語ではついに表現不可能なのであろうか。筆者はかつて、名詞文と動詞(または述語)文の二型の上に文論 *theorie des phrase, Satzlehre, frazeovedenie* をきずくことを構想したが、西洋語の場合、両者を弁別する客観的な標識 *Merkmal, marque, znak* の見出し難いことを考えて、一まずこの想を見送った)。今はしばらく中島氏の提言に従うとして、一般文法の一環としての文論において、*文型 types de phrases, t. of sentences, Satztypen, frazeotipi* なるものはそもそも幾通りあるのか。世界の言語におけるその分布の様態は、その相互関係は、等々、問題は、錯綜を加えると共に、一方では魅力を増すことにもなろう。

西洋語から見ての日本語、あるいは日本語から見ての西洋語——両者の間の相違は、まことに著しく、その間には、言語表現を言語表現たらしめている基本のロヂックというか、発想というか、何かそんな根源のところに根差した違いがあるような気がする。このような事態を何と呼べばよいか。筆者は、homologus と heterologus という用語を提唱したい。ところで homologus は、自然科学の方では、「相同」と訳されているが、その含意するところが、言語現象について筆者の言おうとする意味と重なり合わないようである。すなわち、自然科学における homologus は、絶対的な——H. であるかないかの、二者択一的な概念であるに對して、言語現象においては、そもそも全き意味での homologia は、それ自身に對する場合においてほかになく、例えば日本語の方言動詞の間でも、「……しよる」という活用型のある方言となひ方言の差が見出される。つまり言語の homologia には、段階の差、程度の差が見出されるのである。西洋語同志の間でも、フランス語とイタリア語の間は、フランス語と英語の間よりも H. の度が高く、東アジアの言語ならば、日本語、朝鮮語の方が、日本語モンゴル語よりも H. の関係が密である。そこで訳語については、いささか細工を施して、homologia, heterologia をそれぞれ同相・異相と訳すことにしよう。そして以下は、主として日本語と朝鮮語の同相性を問題にしてみよう。

まず日本語の格助詞「が」に概ね合同な格助詞 *-i-ga* があり、副助詞「は」に概ね合同な副

助詞 -*un* / -*nun* があり、そこで「ぞうは鼻が長い」は、そのままに訳して朝鮮語 *khokki-nun kho-ga kilda* と言ふことができ、「私は蛇がこわい」もそのまま *-nun peam-inusapta* のように言うことができる。かくして、中島氏の見方に従うことにすれば、朝鮮語も日本語と共に描写文を基本とする型の言語に属することになる。なお二三言を費やしてみるならば、それは結局中島氏と同じ事を指摘することになるのだが、西洋語にも現象を現象として描写する表現法が全くないわけではなく、すなわちその場合に、例の非人称構文を用いて、*It rains. || Es regnet. || Il pleut.* と言われる。この現象を東アジアの言語で描写する「雨が降る」|| *pi-ga oda.* における「雨が」|| *pi-ga* は、三上氏の指摘以来言われているように、主格の格助詞「が」|| *ka* が用いられていても、文の主語というよりは、現象を描写する述語を補完する補語といふべく、その意味でそれは、主格というよりは直格と呼ぶ方が適切ということになる。全く同じ形式で言われる「風が吹く」|| *param-i pulda.* は、西洋語でも *Il vente.* *It is windy* || *Es ist windig.* と言われるし、「花が咲く」|| *kkot/h-i phida* の *とぎぎも*、その現象描写性を強調するために *Il fleurit des fleurs.* のような表現も可能である。

中島氏はまた、日本語では、主語のない文の可能であることを指摘しておられるが、本当に主語のない、即ち痕跡 *trace* が潜在しているという解釈さえ成り立たない次のような表現が見出される。久しぶりです || *oregan man-innida.* (*man* が「ぶり」に当たる)。そこで当然の帰結

として、かような文は、文の構成に主語を欠くことのできない西洋語には直訳不可能ということになる。

次の文例でも主語が表出されてはいないが、この場合は痕跡として潜在するという解釈が可能であろう。「刺身を食べたことがある」= *hwe-rul nok-nun dŏŋ-i itta*. 即ち経験を表す言い方であるが、英語・ドイツ語のように時称の用法によらず、日本語と朝鮮語で全く同じ表現が用いられる。

もう一つの西洋語に直訳の不可能な文例を挙げてみると、「次の駅で降りればよい」= *taum yŋ-esŏ nerimŷn tŏtha*. 例文は一応条件文の体裁をとっているが、西洋語に訳すとすれば、まず不定法が用いられることになろう。強いて可能な限り直訳に近付けようとして条件文と主文の複文の構成を用いれば、そこには二つの文が数えられることになる。翻訳に移る前の東アジアの言語の文そのものは、一文か二文か、日本語でも朝鮮語でも、主語は表出されなくても、述語だけで文は成立するので、結果として文の個数を数えようとすると、上のような曖昧さも生じる。文という単位が東アジアの言語では、明哲に定義し難いのである。

日本人が朝鮮語を学んで、よく似ていると思う。それは、もう一步踏み込んでみれば、両言語の間は、かなりの程度まで直訳が可能であるということに他ならない。そして西洋語同志の間もまた、その組み合わせに従って様々の程度に直訳が可能である。同相ということも、具体的には、

その同相の程度に應じて、直訳の可能の程度が定まって来るであらうということを意味しているのである。かくしてここに直訳可能態度 *traductibilitas* という概念が構想されるに至る。意味単位の合同について、何か適当な合理的な基準を設けて、これを点数化する方式を案出し、二言語間の同相性について然るべき基準を見出して、これを点数化し、両者を総合して、直訳可能性を数値的に表現してみることに、そういう課題も追って考えてみたい事柄の一つである。

似ているという素朴な、ほとんど直感的とでもいった程度の感じに誘われて、筆者自身の未熟な万々承知の上で、いささか分析を試みたのが上に記したような事である。

似ているといえば、辻直四郎先生の印欧語比較文法の御講義の始めの方に「多数の特殊かつ顕著な類似点」という言葉が見えるが、ここで言われている類似は、いうまでもなく語形とその意味の類似——*mother, Mutter, mère* ∨ *matrem, mātē* の間に見られるような類似が問題にされているのであって、その種の類似の考究から比較言語学の大きく見事な体系が成立し、印欧語族・ウラル語族・セム語族・南島語族・バントゥ語族等々が定立されるに至ったことは樓説するまでもない。

しかもなお言語学は、始まったばかりの若い学問と見るべきではないかと筆者は思う。

L'homme est mortel. という大前提があつて、*Donc Socrate est mortel.* という結論が導き出される。ところが「あらゆる特定言語*idiome*には、その共通基語がある」という大前提

たるべき命題を証明した人など、どこにもいないのである。Castren が提唱したとかいう、余り根拠も確かでないようなアルタイ語という言葉を手掛りに、何としても日本語の共通基語を見出そうとした人々、あるいは、雄大な飛躍を試みて、デカン高原まで日本語の共通基語を探しに出掛けた人。しかし熱意を込めて求めさえすれば、例えば日本語と朝鮮語の底に、または日本語とタミル語の底に必ず共通基語が見付かるという保証はどこにもないのである。

筆者が日本語と朝鮮語の間に見た類似、あるいはむしろ酷似は語形とその意味の類似ではないので、それは共通基語と両言語の同系とを指してはいない。それでは、意味単位の合同と直訳の可能性の両面からする素朴な直感に基づく酷似の感じは人をいづこへ導いて行くのか。まず、これほどの酷似が偶然の仕業とは筆者には思えない。しかもそれは、意味単位の合同と直訳の可能性を通して認められるのであるから、類型論上の事であるが、問題は、SOV か SVO かといった粗放な抽象的類型論ではなく、可成りの細部 detail, detail に立ちわたる具体的類型論である。(ただし、意味単位の合同が時として共通基語から継承されている場合もあるので、一概に両言語の同系を否定し去るのは控える可きではあろうが、数詞を比べ合わせ、親族名詞や体部の名称などを比較してみると、日本語と朝鮮語の同系の仮説は筆者の眼には忽ちにして色褪せて見える)

類型論の上から見ての言語の収束 convergentia の現象については、バルカンの諸言語に關す

るChr. Sandfeldの先駆的な仕事があり、また泉井久之助教授も「段々似て来るのだよ」と言われたことがあった。これは、大きくかつ魅力のある問題であって、収束現象の起こる条件とかその過程などについての考究は、来たるべき言語学の課題の一つであろう。

実は、バルカンの言語の収束よりはるかにスケイルの大きい収束現象が眼の前にあるのに、西洋人はこれを見ることができなかった。すなわち西洋諸語自身の示している収束である。

「人間は万物の尺度である」という言葉をギリシャの哲人が残しているが、自分自身を標準としてすべてを測ろうとするのは、人間の免がれ難い本性の一面であろう。可成り特異な偏りまたは癖もある言語を用いながら、自分たちの用いる言語こそ自然で標準的なものと思い込んでいた西洋人は、そこに問題になるような収束現象が起こっているというような認識からは遠いところにいたのだろう。北欧の人Sandfeldにはバルカンの言語の収束がよく見えたが、西洋語の全体を外から展望して考えるという課題は、正に日本人のために与えられている問題かも知れない。

さらにもう一つ、西洋諸語はその概ねが印欧語族に属しているという認識も、そこに収束現象のあることを見え難くした事情の一端をなすものかも知れない。しかし、西洋諸語では、SOVからSVOへの転換という広汎な動きが様々の程度に生じているが、ペルシャ語やインド亜大陸のパンチャブ語・ベンガル語などアジアの印欧系言語はこの動きに与からなかった。言語の収束の条件の一つは基本的にはいくつかの民族が西洋のように一つの歴史世界を形成して、共通の文

化伝統を育て、そこに言語文化圏の成立することであろう。日本語と朝鮮語は、ここ壹千年あまりはさほど密接な交渉を持ったように見えず、その壹千年の間はそれぞれ固有の歴史を経て来たはずであるのに、今日の両言語の間に類型論上の酷似が認められることは驚異に値しよう。あるいはそれは、大興安嶺の森林で相異なる言語を用いながら、密接な交渉を持ち、ほぼ共通する狩猟漁労の文化を育んで来たのが、相当の長期にわたったことを物語っているのかも知れない。そのような状況のもとで、両言語の間に語彙の面でのやりとりがなかったはずはないのであって、先学の驥尾に附して筆者もいくつかの例を加えることを試みるならば、「ひー(の木)」: *pi-namu*, 「くー(やき)」: *pe* (舟), 「よろー(〇)」: *yoro* (多くの), 「あ(生)」: *sar-da* (生きる), *saram* (人), 「のる(祝詞^{おまつりことば})」: *nor*, 曰く、のりたまう、呪う): *nor* (歌), *norda* (遊ぶ), 「おすーひ」: *os* (着物), 「買う」: *kaps* (値段)、等。ただし、個々の語についてどちらが与えた方か、受けた方かを判定することは、今となつてはおそらくもはや不可能であろう。

朝鮮語について筆者の知るところは、全く浅く薄い。工夫はなおなお重ねて、せめては満州語、元朝秘史のモンゴル語、トルコ語とウズベク語等に及びたいが、残された寿は、果たして幾年か、何らかの合理的な基準によつて直訳可能度算定の方法を案出し、日本語と、いわゆるアルタイ諸語のほかアイヌ語・ユカギル語・エスキモー語・ケチュア語・ドラヴィダ系諸語などアジアとアメリカのSOV型言語のそれぞれとの間の直訳可能度を測つてみると、そこにどんな数値が並

ぶか——遠い夢である。

ところでこの日本民族と朝鮮民族が三千年前またはもつと前、興安嶺の森の中で、日本語と朝鮮語の間で互いに影響を交え合いながら、用いられておったというのは、これまた一つのヴィジョンと思いますが、これは至って静かなヴィジョンで一向に騒動の種にならない。びっくりするようなことも、奇抜な話の種も何にもないわけであります。ヴィジョンと申しましても、こういう静かで音を立てないヴィジョンもあることを一言申し添えまして、今日のお話しをおわらせて頂きます。

御静聴どうも有難うございました。

(神戸常盤短大客員教授)